

【資料 1】弘安の役後の日本と元のようす 氏名（ ）

元のその後のようす	日本（鎌倉幕府）のその後のようす
1281 年・・・①弘安の役負け戦で、総兵力 14 万人のうち、約 12 万人を失った。 1282 年・・・②高麗（朝鮮）、揚州や泉州（中国南部）に命じて、3000 隻の船の建造を開始した。 ③翌年に日本へ攻め込むことを決めた。 1283 年・・・④日本を攻めるための司令部を設置。 ⑤支配地の各地で海上訓練を実施。 ⑥弘安の役の前に中国の南宋を滅ぼしたことにより、南宋の兵士ら約 40 万人の捕りよをかかえ、支配する上で苦勞していた。 1284 年・・・⑦<u>日本に元の皇帝の国書を持たせた使節を派遣した。</u>	1281 年・・・①御家人は、ほとんど恩賞（土地）が得られなかったもので、幕府への不満が高まった。この苦しさから、九州周辺の御家人が、御家人をやめて浪人となり、武装商船集団（のちの倭寇）になるものが多く現れた。 ②御家人の九州警備（異国警固番役）の期間が無期継続となったため、御家人の負担（借金など）がさらに増えて生活がとても苦しくなった。 ③当分の間、石塁の建設が延長されることになり、御家人の負担がさらに増した。 ④元への先制攻撃として高麗（朝鮮）への出兵を九州北部の 3 か国と近畿の大和・山城の僧兵に命じたが、御家人の苦しさから実行されずに終わった。 ※「元史」日本伝などより引用

【資料 2】使節が持ってきたフビライの国書

むかし、あなたの国（日本）はよく使節を送り、天子（中国皇帝）への訪問を許され、つつしんで接見していた。それに対して中国皇帝も使節を送ってかえした。それなのに、最近の日本は、わが国の使節を捕らえて返さなかった。そこで、わたしは使節を送ってとがめた。しかし、日本は固くわが使節をこばむ。

よって、日本はすでに敵国となり、さらにこちらから使節を送るべき理由はないが、高僧の如智（にょち）らが「もし、また軍を送って日本に攻め込めば、多くの命が失われる。日本にも仏教の教えを理解している者がおり、大小強弱（日本と元のどちらが大きくて、強い）のか（論理）はわかっているはずだ。日本は自ら反省し、心から元に従うだろう」という。今、高僧如智とあと 2 人を日本に行かせた。善なるものは和のほかになく、悪なるものは戦争のほかはない。これをじっくり考えて従えば、すぐに使節を元に送りなさい。この国書にある私の意を全て知り、じっくり考えなさい。